人間環境活性化研究会会報（第１８号）

『文化は人間環境』　　理事　　内田　裕久

最近、まったく異なる機会に来日した外国の知人から同じような批判を受けた。「日本人はなぜ自国文化を壊すのか」という質問である。

1. フイリペク教授の場合：

フイリペク教授は元駐日ポーランド大使館科学技術担当官を勤め、現在ポーランド科学アカデミー物理化学研究所所長である。専門は超高圧物理であるが、ワルシャワ大学日本学科修士課程も修了し、日本文化への理解も大変深い。娘さんにサクラという名前を付けた程、大の親日家である。

ある日、「あの京都新駅ビルは誰が設計し、誰が許可したのですか。京都は日本人の心の故郷でしょう。古都に不釣合な巨大な建物を許し、なぜ日本人は自国の文化を壊すのですか」と迫られた。フィリペク氏が日本にこだわる大きな理由がある。

第一次大戦中、シベリアまで送り込まれていた多くのポーランド人達がロシア革命の余波を受け、祖国に帰国できなくなった。子供達だけでも祖国へ送り返したいという親の願いも虚しく、西へ向かう道は遮断されてしまった。そこで、ポーランドの子供達を救ったのが日本であった。ウラジオストックに入港していた日本赤十字の船が数百名に及ぶポーランドの子供達を日本へ運んだ。子供達は長期滞在後、米国経由で祖国に帰った。当時ポーランド人が神戸でお世話になった御礼にと、フイリペク氏は政府を動かし、神戸大震災で家族を失った日本人の子供達をポーランドに招待した。

幸い、当時神戸の生活を体験された 90 才のポーランド人の方も御健在で大いに喜ばれたという。

日本とポーランドの架け橋として活躍するフイリペク氏が嘆き指摘する、日本人の日本文化に対する意識の低さは的を得ている。

2. オットー教授の場合：

ドイツ、シュツトガルト大学建築学科のオットー・フライ教授は数学のポテンシャル曲面を屋根としたミュンヘンオリンピック競技場の設計を代表に、世界で活躍する建築家だ。シュツトガルト大学のオットー先生の研究室は三角錐に近いポテンシャル曲面をガラス張りにし、ふんだんに太陽光と植物を取り入れている。オットー氏は人間環境を意識した科学技術ーエコテクノロジーの実践に貢献した理由で本田賞を受賞されている。

先月、久々にオットー氏御夫妻に西新宿にあるタワー風 41 階建ての米国系ホテルの和風レストランでお会いした。

大型の白黒の抽象写真画像が吊り下げられ、竹をデザインした鉄パイプの柵が空間を仕切る。「こういうアメリカンスタイルの和風はどうですか」という問いにオットー氏は「こういう訳のわからないスタイルを最近はジャパニーズスタイルと呼ぶんだ。和風には違いないよ」と笑われた。

「自然を基調とし、人間にやさしい紙と木の伝統文化はどうしたのかな」と呟かれたオットー先生の言葉がフイリペク氏の批判と重なった。

3. 日本の人間環境は大丈夫？

海外の先進国は自国の歴史を示す古都の保存には非常に注意を払う。ハイデルベルグ、ローテンプルグ等、多くの日本人観光客が訪れるドイツの歴史的都市は自国の文化を誇る国民が法規制の下に保存している。日本人は西洋のクラシック音楽、オペラ演奏に豪勢な劇場を造り、大挙して海外の歴史的観光地を訪れる。しかし日本では国内の歴史的都の保存の重要性を考えているのだろうか。

第二次大戦で米軍は文化的価値を重んじ京都を爆撃しなかった。しかし文化的、伝統的調和など無視した京都新駅ビルに象徴されるように、建築基準法に違反しなければ建築させてしまう風土をみる限り、産業、商売、金優先という日本国民と行政の意識の低さは依然として開発途上国レベルである。

環境とは人間生活を取り巻くあらゆる雰囲気、条件を指す。生活にとけ込み地域性の強い文化も環境である。普段意識しないがゆえにその危機的状態にも気づけない。文化に無視、破壊は人間環境問題なのである。

学校で日本の歴史、文化、国家としての日本という環境や、その中で社会を形成する日本人という事実を教えずに、日の丸、君が代を議論しても意味はない。

（東海大学工学部教授・研究推進部部長）